

医・薬・看護連携チームラーニング ー地域参加型学習の導入

■取組担当代表者 木村 和哲

名古屋市立大学では、平成20年度から1年生に医・薬・看護連携早期体験学習を行なっております。連携早期体験学習の目標は、入学後早期から医療人としての自覚と使命感を持ち、自ら課題を見つけ解決する課題探求型の学習姿勢と、医療人に必要なチームワーク能力を習得することです。入学直後から医学部生・薬学部生・看護学部生1学年約240名が金曜日の午前中に集まり、1チーム10名前後の学部混成チームを作り、名市大病院などで様々な臨床体験を行ってきました。各チームには「自学名市大を知る」のメインテーマのもと24チームがさまざまな研究課題を見つけ、グループ研究とその成果発表を行ってきました。そして、今年からはグループ研究のテーマを学外にも広げ、過疎地域の医療の現状を知るために「愛知県北設楽郡豊根村富山地区」と「三河湾の篠島」の調査研究を行いました。この地域の調査研究は、地元の人たちとのふれあいから地域のニーズを発見し、「学生なればこそできる」課題解決を通じて、医療人としての姿勢や実践力を習得して欲しい狙いがあります。

富山地区担当の学生グループは、8月17日から2日間の現地調査を行い、連携教育担当教員も同じ時に現地を視察しました(写真1)。富山集落は、昭和30年に佐久間ダムによって水没した村落が山麓に移転してできた

村です(写真2)。昭和35年に人口654人の本州最小の村となり、平成17年に富山村と合併しましたが、現在の集落人口は137名です。地域に産業は殆どなく、収入源は公務員と災害に対する道路工事です。診療所に医師が来るのは週に2日で、当日、豊根村から来た医師に学生がインタビューし、僻地医療の非常に現実的な話を聴きました。一方、豊かな自然と人々の強い結びつきがあり、学生達が行ったバーベキューでは集落の全小中学生(10名)を含む多くの住人と打ち解け、翌日の家庭や学校の訪問調査もスムーズに進みました。集落には離村者の空き家が多く、山村暮らしの希望者からの問い合わせは多いようですが、村への愛着から家を手放せず、未だ入村者はないようです。医療だけでなく、建築や文化、経済面からの大学の関わりで地域の持続可能な発展が可能ではないかと感じました。

篠島担当の学生グループは、知多厚生病院の協力を得て6月14日と8月20日に現地調査を行いました。名古屋から電車と高速船による移動で思ったほど時間がかからず、あまり「離島」という印象は受けなかったようです。学生たちは篠島の現状や行事を調べ、診療所の役割調査や患者さんからのインタビューなど積極的に活動しました。特に、海南病院の2年目研修医による島の人の



写真1 豊根村役場富山支所にて



写真2 佐久間ダム湖と富山集落

ちへの講演活動が印象的だったみたいです。

地域を学習の場とする「地域基盤型学習」は多くの大学で行われていますが、学生が一時的にやってきて去っていだけで終わるケースが多いようです。本学ではこれを一歩進め、「地域参加型学習」を目指したいと考えています。その理念は、学生が地域の人たちと人間的な関わりを通じて地域医療に対する連帯感・責任感を養成すること、さらに地域と大学間の連携による卒業キャリアに対する健全なビジョンの養成であります。幸い、この取り組みが、「医療系学部連携チームによる地域参加型学習」として、文部科学省の平成21年度GP大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラ

ムに採択されました。来年度は今年の活動を継続発展するとともに、この活動を都市部にも広げたいと考えています。

最後に、富山地区および篠島の調査において、ご理解と暖かいご協力を頂いた住民の皆様、役場、診療所、また知多厚生病院宮本忠壽院長にこの場をお借りして心より御礼を申し上げます。

医療系学部連携教育委員会（AMEC：Allied Medical Education Committee）

（早野順一郎、木村和哲、浅井清文、飯塚成志、鈴木 匡、前田 徹、明石恵子）

医薬看護学部連携早期体験学習に参加して —豊根村富山地区における地域医療の現地調査—

■薬学部1年 高嶋 悠、小笠原 美沙、柳川 亜由美

医・薬・看護連携早期体験学習のグループ研究として、私たちのグループは山村遠隔地における医療ニーズの実態把握を目的に、平成21年8月17日から2日間の日程で豊根村富山地区の現地調査を行いました。富山集落は、愛知県内とはいえ名古屋から現地までは4時間を要し、地区に一つしかない診療所に医師が来るのは週に2日の午後のみ、緊急時にはドクターヘリが利用されています。現地では支所長をはじめとする役場の方々、および地区診療所の医師との面談により、地域医療の実態について聞き取り調査を行いました（写真3）。戸別訪問による聞き取り調査では、村民の方々の個別のニーズについて話が聞け、以外にも老人保健・保養のための施設は充実していましたが、需要が少なく施設維持が難しいとのことでした。また、患者の搬送が地域住民の連携によって支えられているなど地域特有の実情も明らかとなりました。

薬学部の学生として印象に残ったことは、富山地区には薬剤師が一人もいなかったということです。薬の管理は医師と数人の看護師だけで行い、薬の種類も集落の人々が必要とする最低限の種類しか備えていませんでした。役場の職員から、私たちのような将来薬剤師として活躍するような人材は富山地区を含めた遠隔地にとっては貴重な存在で、今すぐ必要としていますと言われた

時は地域医療の実態を改めて痛感しました。同時にこれからの地域医療における薬剤師の役割や住民のみなさんが薬剤師に求めるニーズについて、もっと具体的に考え、取り組んで行きたいと思いました。また、薬学部に入學した直後に他学部の学生と一緒にこのような経験ができたことは、今後、薬学を勉強していく上で幅広い視点を持つことができるようになったと思います。

最後に、富山地区の調査に際してご理解とご協力をいただいた豊根村役場および富山支所、診療所および村民の皆様がこの場をお借りしてお礼申し上げます。



写真3 富山診療所訪問